三
繪本通寶志

70.

34

畫師浪速　橘有税

通寶志

全部　十冊

浪華書舗　稱觥堂版

畫本通寶志序

夫吮筆和墨之徒非尚清遠之趣則未得天真横逸之精是故摩詰之江山與可之墨竹皆以獨歩千載爲宜哉畫圖之於技余

蓋使往昔之不可以視異
域之不可以渉山川草木
禽獸蟲魚畫傳之以昭々
於目前所謂奪天地之工
浅造化之秘寶不虚語也
晋唐以来自五侯搢紳以

至閭里善畫者未嘗鮮然
而吾
皇和最為精矣坂陽橘生
守國以畫鳴者也一日
袖畫来謁余曰前圖設事
談及寫寶器等數件刊頃

寫其所遺已而成圖令欵
玆行以壽于世請復為之
序余熟展之謂生曰於戲
至哉子之用筆也且為其
筆韻生動經營摸寫精工
倍加於前日幾得畫圖神

手者乎不可以鹵莽滅裂
塗抹而成者同日不但為
丹青家之通寶乃當以止
彼畫虎之誤也何為待余
之言耶生固請不已遂書
其端

享保十四歳己酉八月
摂江隠士椎本才麿舊徳述

[illegible]序

論語曰。[illegible]
[illegible]也。以[illegible]
未知生焉知死。曰[illegible]
[illegible]周禮。曰[illegible]
[illegible]。曰[illegible]。曰[illegible]也。周
[illegible]也[illegible]

也。形於上也也。氣於下而[illegible]人也。
人能聚之[illegible]也。地理[illegible]。
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

豈猶于聖人之意哉○為家之筆因テ○

自ラ恥ス之ヲ愚意○

後素軒　橘守国

繪本通寶志巻之一目録

四時農業

唐土にも故事稀ひとしより入寇まで農夫の業を委しく寫す

播州舞子濱

童遅網漁之圖

騎射狩之圖　三丁

鞠鳥之圖

鷹狩之圖　二丁

鵜川之圖
河狩之圖
沖網之圖
地引網之圖
海士いさり火の圖
玉藻苅之圖
花月之圖

張綱 署

農業圖と晝始しハ唐高宗皇帝の臣朝議大夫田丈の芳者と爲圖以狀を書し又作詩以て畧と捧皇帝しより代々に傳り和國ゑも是を晝き傳也古より和漢兩圖有といへども事を除て不足を今畧する処の大和耕作其家畧を補畧して為二一巻

和國耕作圖

稲は世に生まれて
此米を食する人は
農人のあつきぜれ
此米作つくる耕
とあらざらんやある
づりしずあらば重
どくも田舎に住
居せずしていふと
もくその生を
収穫の事どもを
あらはしかうら
ゆくまでこれを絵
に写して農人
の力をたりひ
辛労してつ
生じ
このうちつ
とをしるべく
おぼえたる

民とおのれ
これをまもひ
唐人は米
穀を大切
にあつか
べきなり
まことも
あるべし
種かしをそ
早稲とて
る法はあげ
をまぜる
ぶんより廿日めに
あがりしか廿日すぎ
てとりて十日日
まいりまひきさ
ぶんの湯をたすの
うへよりかけむしろ
あくまでおりの芽と
あし二月中のせつよ

まくあり
とりあぐる

苗代
今ぞ
日に

苗代
堀河百首
仲実のうた

曽祢の好忠のうた
山田の
僧都に

田のあらくれすり
なまき田へふりく
ひしく
日よりあしきには
寒三
ふか
ゆて
わしときに
時分に
めあと
もちて
あと
ありけ
かき
まし
なさし
うしとき
苗代
さほつき
時のよりて

ならすた
翠あとくてうらて
すゝうお務どりて
りそりひ出来るとき
糞ともへをとき
うそるそこと
二三ばんも
かきおろして
苗とさす下
深田へぞんめ
おかり日ふ
めつるるく
うんまう努う
あらくして
熱氣下すで
こゆしざれば
苗さうへぬ柏
ありなるゆく
井でかりるで
あの自由なる田へをいぶん

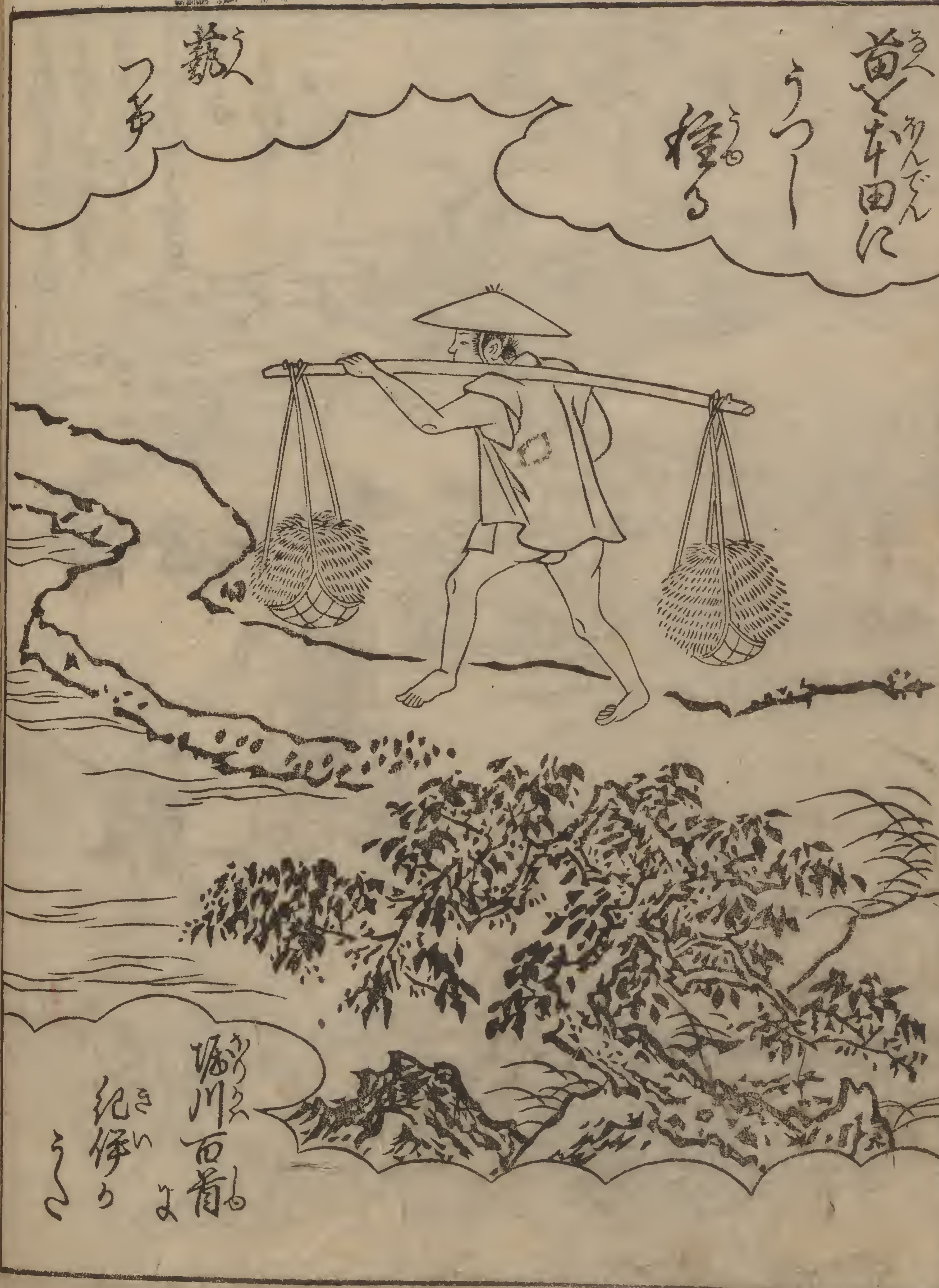
貫之
家集

あら小田代
人をまうし
人まれ
おりひ
かへり
出んをし
せ
さる

苗代の苗ハ
長さ七八寸
ばかりのときぞ
とりてうゆれ
とハいへども
山田などハ
水のさむき所ハ
さらにおそきを
うゆるがよし
深田などの
水のあつまる所ハ
みじかき苗を
うゆべし大暑の時
苗あれつくぬ
ところなきを
苗とさくるがとハ
およそ一反の
田に三万と中分と
するなり

されども肥たる田ハ
うすくうゆべし
田中へあつく
うゑむべからず
せうに
まけて
うゆ
べし

五月に
わかれて
苗代より
生いづる
苗代
より
まけて
まづ田へくばり
荷ひゆく


苗を本田にうつし植る
藪つ多
堀川百首よ紀伊うさ

早乙女
うゆる時分ハ夏至のころより半夏十日まで稲苗をとりうゆるこれより中田晩田十日ほどづゝをくれて時節とすそれより夏至の節より夏の芒種の苗までの日を梅の雨とよびて天下一同の農中なり
とゞまるじと山田の早苗とる田子乃裳すそそあれひまなき貞

くさとり
芸

源重之
草(くさ)も木(き)も
動(うご)かぬ
夜(よる)れ
てる
日本を
京
中
ま
風や
吹く
らん
すうこしや
まそ思ふ
なと
うくへの

萬歳の家集に
わくごに
よ
めが
ら
し
を
うえし田風
いなだをそ
まとふれ
かる
る

田面乃鴈

からさを
もて
りくを
うつ
所

いねを
こく
所

もみを簸てゐる

とうすにてもみをするなり

舞子濱（まひこがはま）

漁の之川圖
すなどり

樋の口
ひ

騎射狩之圖

翔鳥之図（かけるとりのづ）

本町

鷹狩之圖

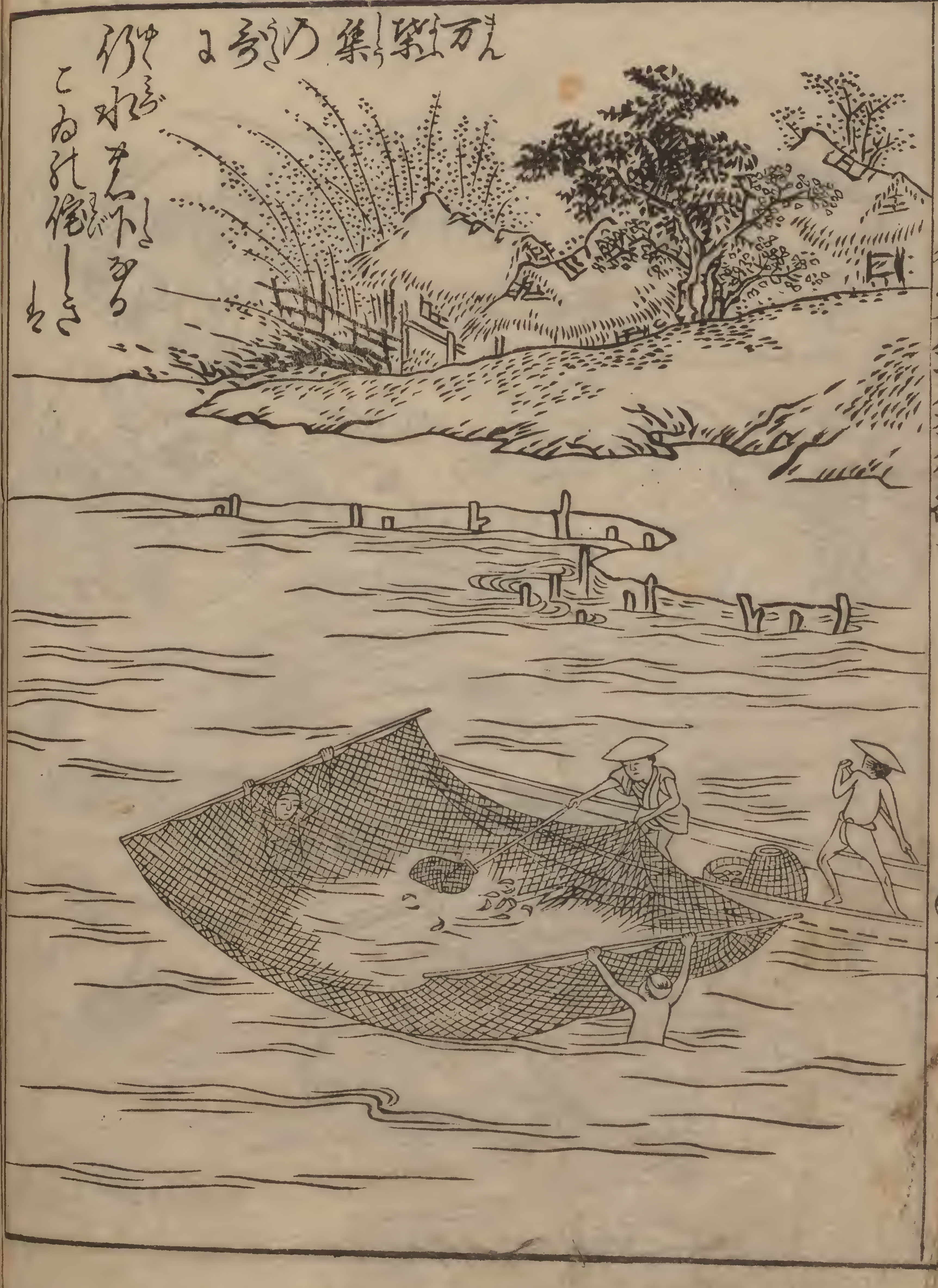
鷹狩(たかゞり)の名(な)あり
なれ公卿(くぎやう)のもてあそび
なりしゆへ
むかしは
鷹(こぎ)をたまは
りしと
あり
後武家(のちぶけ)に
まなびしゆへ
在々(ざい)にもしく
すゑまくす
松(まつ)にのせたり

鷹飼(たかがひ)かしこの物(かつ)ぐをかうむる

寺に
〻し鷹を
放(はな)ちより
こゝさかれ
鶉(うづら)なかり
大宮(おほみや)人は
雉(こぎ)狩り
すくあり

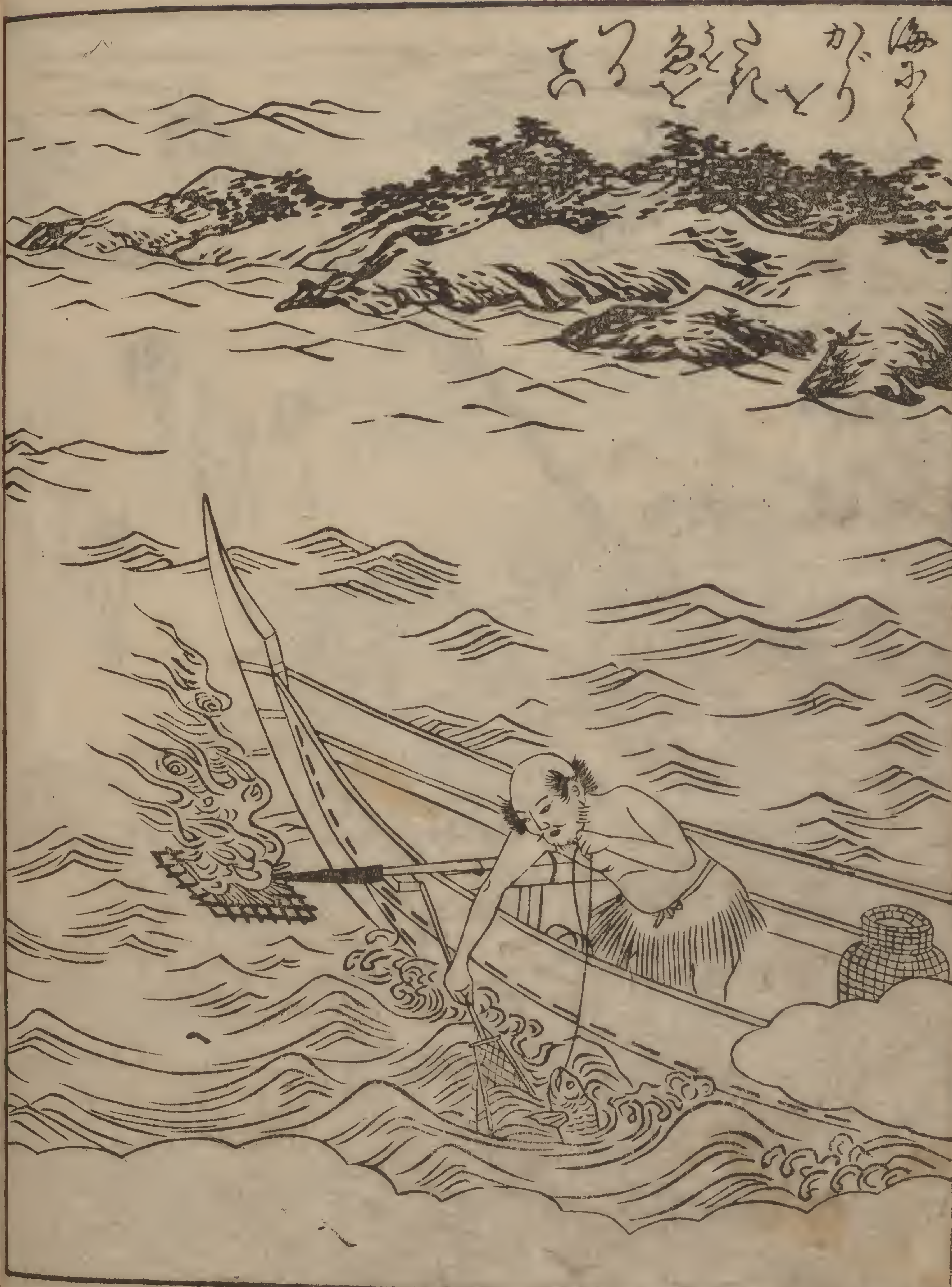
犬(いぬ)ひき
松(まつ)にかゝりし
子のつく常

鵜と遣ふ図
後撰集にあり業平の歌
大ゐ川鵜かべる舟の
かゞり火に
をぐらの山も
名のみなりけり
業平


万葉集のうたに

沖網
當州
海のおきにてあミ引を沖網といふなり
万葉集のうたに
住乃江の津守網引のうきとの浮ひやゆかん恋つあらすは

地引網之圖
海乃さきまそあくひくこれを地引と云
万葉集に奥風の云
おし大ミやの
うらまできこゆ網引とと
網子ととのふるあまれよび聲


海ふかくかゞりと見えし魚をつるあま

後撰集　長谷雄
塩まにあさりする泉郎も己が世々かひありとこそおもふべらなり

海士の
女わらハ
潮乃干に
濱べへ出
海草とり
貝をとり
てい

万葉集に
角丸のうた
塩がれの
三川乃
海人女がくゞつもち
玉藻かる舟
いざゆきて
みん

同　よみ人しらず

しかのあまはめかり
塩やきいとま
なミ
くしけの
小櫛
とりも
見なく
に

一三八八

[illegible]